

二〇〇一年 一月二日

TREE HOUSE、ヘレンケラー記念塔、上九一色計画、ひろしまハウスインプノンペン、の流れによろやく1つの径筋を
発見しかかっているように思う。

「身体の悲劇」の連作と直感的に呼ぼうとしていたのだが、むしろこの連作は近代そのものの、その結果として近代建築の限界を自然に浮き上がらせる仕組として扱えた方が生産的なのだ。近代的な計画概念は常に健常に想定された機能に対する諸物質の配置概念であった。20世紀を象徴する建築形式はオフィスビルであった。前世紀の帰結は高度に管理化された資本主義の貨幣の自由であった。貨幣の自由は人間生活の自由をはるかに超え、情報と共に今や国家の境界を越え、資本そのものの自在な体系を構築し始めた。オフィスビルはそのような現代資本主義の装置として表象されるものになった。ミースの鉄とガラスの建築形式はその貨幣の自由の装置として最も有効な抽象性を持つものとして多用された。貨幣と情報は共通する性格を持つ。それは極めて抽象的な性格を持つものだから、眼に視えにくいものだ。形が無いように考えられる。それ故にガラスの透明性に親近感を持つ。現代建築がその用途を問わず、大勢として巨大なパッケージ化の傾向を

示しているのはそのような理由からだ。ガラスの箱の透明性は情報・貨幣の基本的な性格を良く表現しやすいのだ。それは貨幣・情報の強力な流通・交通性を表現しやすい。

TREE HOUSE、ヘレンケラー記念塔等の仕事の意味は何か。それは近代の計画学、モダンデザインが避けてきた、非正常つまり異者の問題を主題にしていることだろう。正常は常にアウトサイダーを嫌う。均算化された正常にとってアウトサイダーは間違いとして眼に写るからだ。しかし非正常者の問題こそは本格的な多様性の問題でもある。近代が避けてきた問題は多様な生の在り方だったのではないか。機能主義、近代デザイン共に建築家をも含めた生産合理主義、つまり正常者の論理であった。その論理は広義な意味での生産合理主義であり、貨幣の論理でもある。

TREE HOUSE、ヘレンケラー記念塔のデザインの意味は深くアウトサイダーの側に身を寄せ、多様性について考え始めようとしていることである。障害者の問題は又、ひろしまや上九一色村の悲劇の問題にまで辿り着く。正常者の中に潜む悪の問題である。日本が経済の問題に明け暮れていた時に、アフリカでは凄惨としか言い様のない、民族間の大虐殺が起きていた。人間は常に正常の衣を着た悪になり得る可能性を持つ。余りのノーマルさは常に多様性に対するホロコーストの役割を成しかねぬのだ。

二〇〇一年に少しづつ姿を現わし始める、私の仕事は弱者に身を寄せようとしているのではない。より直接的に異者、アウトサイダーの多様性に加担しようとしている。

アウトサイダーの多様性とは、別の系から攻めようとしている開放系技術の問題へとつながってゆく可能性を持つことは言うま

でもない。

建築家の自由を言っているのではない。建築家が自由であること、なかるうとそれは問題ではない。個々人の自由、個々に貨幣のアンーキズムに不自由になっている人間が、本来所有している多様な尊厳の自由のための道具を用意しようと言っている。

一月四日

二川幸夫さんと仙台往復。伊東豊雄の仙台メディアテック見学。十二日の伊東さんとの対談にそなえて。良い建築であることに間違いないが、革新的な建築ではない。ガラスの建築の抽象性と鉄のゆがんだ構造の矛盾が目立った。